

名古屋。戦後意外史 第二部 ②

「塀の中」と戦災孤児たちの食糧事情

彼らはどうして暮らしているか？

終戦直後、市民の多くは食うことに精一杯だった。当時、刑務所の住人たちと戦災孤児はどうしていたのか？ 名古屋タイムズが昭和二十一年五月二十七日にその内幕のルポを掲載している。まず刑務所――。

「名古屋刑務所の赤煉瓦の塀をくぐると十数名の受刑者が畑の耕作をやっていた。広い構内の焼跡が畑に化し麦や玉ねぎがよくできている。みんな頑丈そうだ。●●所長に会うとまずこう言った。〃

刑務所の食生活など書いてほしくないね。うっかり書いて志願者が出ても困る〃。

当時、名古屋刑務所は現在の吹上公園にあった。受刑者は一三〇〇人。受刑者の食事には規定があった。勤労によって一等から五等まであり、少ない者は一日米麦二合二勺、多い者は四合四勺。規定の最低必要カロリーは二四〇〇カロリーが維持されていた。当時の名古屋市民の配給食糧による一日の摂取カロリーは一〇五五カロリーで、塀の中では市民の二倍以上のカロリーを摂取していた計算だ。

こうした待遇が塀の外にも伝わり、ちまたでは「刑務所の方がたくさん食える」といううわさが広がっていた。所長が取材に難色を示したのはこのためだが、若干の誤解があると所長は説明している。

問題は副食。刑務所の副食は規定で一人一日一七銭となっていた。この中には味噌、しょう油などの調味料も含まれており、塀の外のような闇市場もないため到底賄えない。そこで、所内で野菜を栽培した。さらなる増産を図って、所内のグラウンドを開墾する計画があったが、受刑者たちから「あそこで野球をやるのが何よりの楽

しみだ」と断られたとか。

◇
続いて記者が向かったのが市内にある戦災孤児の寮。ここは終戦直後の昭和二十年八月二十九日に開設、当時男子二五人、女子七人が収容されていた。寮長の話――。

「名古屋駅構内の浮浪者にまじっていたものを収容しました。構内を駆け回り復員軍人を見つけると『私のお父さんはフィリピンで戦死したのです。家は焼かれ母は死にました』などと憐みを乞い、ものをもらって飽食していたので、最初は窮屈な寮生活をきらいすぐ飛び出してしまい、駅で探し